

# 山本一清博士・他界前一ヶ月について

坂井義人

## 1、はじめに

山本一清(やまもと・かずきよ・通称・ヤマモト・イッセイ)博士の来歴については、国立天文台・歴史的記録と現代科学研究会その他の機会を通じて、報告者の過去60年に亘る記憶と客観的記録に基づき、それらの紹介の機会を頂いてきた。山本博士の生涯活動の俯瞰と、また未だ完全とは言いがたい晩年の来歴の一端を垣間見る機会を頂いた事とも言えるであろう。そして今般、その最晩年に至る経緯を、同博士の他界前二年間の貴重なる自筆記録その他を基に、改めて結論的な推論等を披瀝させていただく事としたい。特に紹介資料等は、山本家ご遺族様より京都大学宇宙物理学教室に寄付された、膨大なる資料類のごく一部ではあるが、他に比類を見ない貴重品であり、そのことを念頭に以下の論考を進めたいと思う。そのような次第から、表題に挙げた「山本一清博士・他界前一ヶ月について」の理解並び、些かなりとも同博士慰霊、またその関係の物故された方様たちへの畏敬と挽歌ともなれば、誠に望外の幸である。(以下、山本博士は山本師と表記する)

## 2、山本一清博士の略歴



若き日の山本博士



京大花山天文台の山本博士

- 1889年5月27日 滋賀県栗田郡上田上桐生289番地にて出生
- 1907年3月 滋賀県立膳所中学校卒業 同9月第三高等学校第二部工科入学
- 1908年6月23日 京都市平安教会にて西尾幸太郎牧師より受洗、19歳
- 1910年7月 第三高等学校卒業、9月京都帝国大学理工科大学物理学学科入学(学生としてハレー彗星観測に関心)
- 1913年7月13日 京都帝国大学卒業、同大学院入学、同12月14日結婚
- 1914年1月 緯度観測所臨時嘱託、同5月水沢赴任(1916年京大)

1914年4月24日 京都帝大理工科大学助手、翌年講師、  
 1916年より1922年まで、測地学委員会囑託にて、約280点の重力測定  
 1918年6月9日 鳥島で日食観測 10月19日京都帝国大学助教授  
 1920年9月1日 古川龍城氏らと天文同好会（後の東亜天文学会）を設立  
 1921年6月23日 天文啓蒙書・星座の親しみ、第一版の発行ベストセラー  
 1922年9月11日 文部省在外研究員として米・英・独・仏各国に留学  
 1925年3月3日 帰国 同4月18日京都帝国大学教授  
 同7月20日 理学博士学位取得  
 1927年6月 中国奉天にて、ポン・ウィンネッケ彗星観測 同11月  
 10日台湾にて水星太陽面通過を観測 同12月英国BAA  
 のグドエーカー氏（Mr Goodacre）より、カルヴァー46セ  
 ンチ反射望遠鏡赤道儀を譲り受ける  
 1928年12月末 台湾にて、ヤマザキ・フォーボス彗星、がが座新星観測  
 1929年5月9日 スマトラにて日食観測 同6月ジャワにて太平洋学術会議出席  
 1929年10月 花山天文台設立  
 1933年6月 カナダにて第五回太平洋学術会議参加、米国天文視察  
 1934年12月 台北市にて日本学術会議第10回総会出席  
 1935年4月 台中観測所地震災害調査 同10月中国各地等視察  
 1935年7月 国際天文同盟黄道光委員会初代委員長推薦就任  
 1936年6月19日 ソビエト連邦オムスクにて日食観測  
 1937年3月1日 勲三等叙勲  
 1937年6月8日 ペルーにて日食観測 同年広島県福山市外に黄道光観所設置  
 1938年5月30日 高等官一等・従四位 5月31日依願退職  
 6月13日 正四位 同8月ストックホルムにて国際天文連盟総会出席第  
 二期黄道光委員会委員長に就任  
 同9月22日 スウェーデン国天文学史学会名誉会員  
 1939年3月 満州国、中国華北地方を三ヶ月間遊歴  
 1940年10月 私設・田上天文台建設に着手、11月より観測開始  
 カルヴァー46センチ反射望遠鏡赤道儀設置  
 （1942年5月25日、天文台落成式挙行）  
 1941年9月21日 台湾北部の富貴角にて日食観測  
 1946年4月10日 衆議院議員総選挙に社会党公認立候補、35人中10位落選  
 1947年4月5日 滋賀県知事選挙に社会党公認立候補落選  
 1948年8月25日 上田上村長選挙無投票当選、9月1日就任、翌年10月28  
 日辞任  
 1955年1月 創立者の名に因み、山本天文台と改称  
 1956年頃 神道系宗教法人・三五教（アナナイ教）よりの要請に基づき、  
 天文活動指導に協力着手  
 1957年1月5日 静岡県沼津市に三五中央天文台（通称・香貫山天文台）  
 建設を清水市教団本部にて発表、直ちに建設着手  
 （山本一清ご夫妻、宮本正太郎博士ほか学術関係者臨席）

- 1957年3月20日 静岡県清水市にて三五天文暦算局開設挨拶状を天文関係者に送付（三五天文暦算局はアナナイとルビ表記）
- 1957年9月21日 沼津市・三五中央天文台落成式 カルヴァー46センチ反射望遠鏡赤道儀を山本天文台より貸与移設
- 1958年4月19日 鹿児島県指宿市にて日食観測
- 1958年秋 山本ご夫妻、運用方針問題で滋賀県に帰郷
- 1959年1月16日 滋賀県草津市大路井町420番地、午前10時13分病氣療養永眠、享年70歳
- 1959年1月18日 日本キリスト教団草津教会にて、東亜天文学会告別式（東亜天文学会誌・天界にて特集号発行）
- 1962年(S37年) カルヴァー46cmは、山本家意向の下、坂井義雄の斡旋により山本天文台より岐阜市「富田学園」に売却移設  
約30年の後、不要となった折は坂井義雄にて譲り受ける  
口頭約定に則り、坂井義雄による私的所有移転

山本博士の略歴は凡そ以上である。また特に注目いただくべきは、神道系・三五教団との関係である。三五と書いて「あなない」と称される。この団体は、明治期に立教した神道系新興教団「おほもと」(大本)の後の分派的宗教団体の一つであり、他にも同様に分派独立をなした宗教団体も多く存在する。世に「大本水系」とも称されるこの一連の宗教系列の祖「おほもと」とは、国常立尊(くにのこたちのみこと)と称された、日本神話の原初的な神名に基づき立教したともいわれる。「三千世界一度に開く梅の花、丑寅の金神の世となりたぞよ・・・」という神諭は、知る人ぞ知るという印象が深く、「世の立替え立直し」を精神的指導性の柱とした。それは、既に老齢に至った「出口なお」という女性を教祖とし、その後は日本社会に大きな影響を及ぼした教団としても記憶されている。一例であるが、英米文学者の浅野和二郎、また陸軍軍人で満州事変を経て傀儡国家・満州国を成立させたという石原莞爾など、多くの知識人その他を信者として擁したとも言う。

「あなない教団」は、大本信者であった静岡県の土建業者「中野與之助」という人物により1949年・昭和24年に立教されたという。他の宗教団体でも人類の祖とか、宇宙生成の神など、多くは天文的な価値観に基づくことが多いが、この団体の場合は、その後に天文学を教義的内容に取り入れて、本邦初の宗教天文台施設の建設等に邁進して行った団体でもある。1957年・昭和32年、沼津市香貫山頂「三五教天文台」が設置され、その指導性を発揮されたのが、かくいう山本博士であった。これらの経緯については、既に拙稿その他関係者の報告文が出されているので、詳しくはそれらも参照願わしい。

そして今回は、それらの経緯を踏まえ、報告者としての感慨をお許し願いつつ、山本博士の最晩年に焦点を当て、同師の他界一ヶ月前の事象とその心境までを推論できればと思う。

なお、山本師は京都大学を退官するに当たり、その元凶は46センチ・カルヴァー反射望遠鏡をイギリスより購入した際、その会計処理不明確であったためと言われる。その機材は教団天文台に貸与されるのであるが、自身の設立団体・東亜天文学会関係者も、それらの経緯はおろか、教団との関係構築に対しても、謎めいた状況だったという。しかし乍ら、学会の財政に対して山本師は負債を託っており、逝去後にはその後の上記望遠鏡の売却によって、ご遺族は解決をされたとも言う。山本師に対して、三尺下がって師の影踏まずであろう。

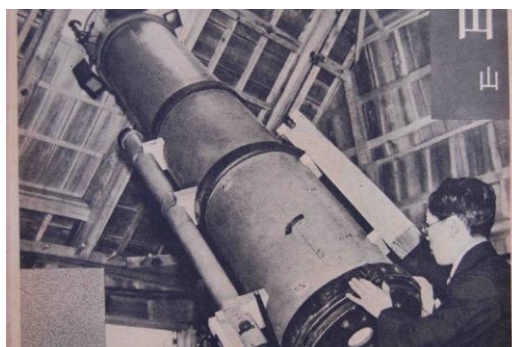
### 3、山本博士と教団天文との関係並び終焉

#### (1) 山本博士と教団との関係推移

山本師と三五教団との関係は、上記略年表に記された最晩年に至る、僅か三年程度という短さである。これは、関係開始から僅かなる時間推移と、またその逝去にいたるまでの病魔発症という悲劇とも重なる。人生というものは所詮思うに任せぬことが多いのは当然ながらも、余りにもその年月の推移は、山本師にとっては失意と焦りの時間だったとも省みられる。1956年・昭和31年より山本個人天文施設を訪ねた教団側との相互協力が開始され、翌年の1月には天文台の設置が宣言されて、そしてその一年後の1957年・昭和32年3月20日には、『三五(アナナイ)天文暦算局』設置挨拶状を関係各位へ提示し、なおかつ後の静岡県沼津市香貫(かぬき)山頂に、『三五・アナナイ中央天文台』(正式名称アナナイ月光天文台)の建設も開始された。天文台の落慶は昭和32年9月21日、神社様式の建物の中に、急遽、山本天文台より46cmカルヴァー反射望遠鏡が移設された。香貫山を仰ぐ沼津市内には、天文祭りと呼ばれる神事的な催しが繰り広げられ、山本博士の衣冠束帯姿とともに、些か異様感も伴いつつ、その将来がその時は展望された。しかし乍ら、そこには山本師独自の判断と行動を起因とする影が忍び寄っていた。今回は、今まで殆ど明らかにされて来なかった資料類を中心として、その経緯を以下示していく事とする。



在りし日の山本天文台・滋賀県



山本博士と46cmカルヴァー反射鏡



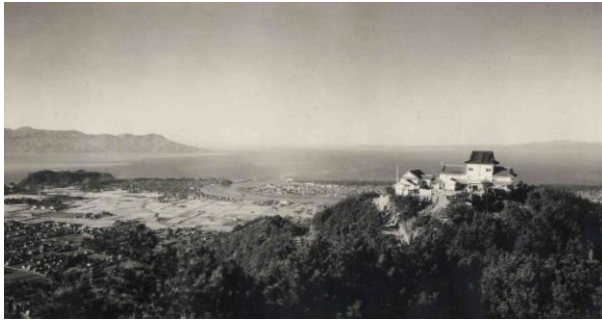
山本天文台研究室



京都大学所蔵 山本天文台移設遺品の一部

ここに載せた写真は、在りし日の山本天文台の建物外観と、内部の観測室及び、研究室等である。この建物自体、既に山本家として取り壊されたものであるが、京都大学建築関係でも着目され、後日その紹介図書も出版されて、詳細はそれらを参照願いたい。また、山本師遺品の数々は同大宇宙物理教室に寄付されて、今は花山天文台博物館構想に基づき、移管收藏されている。遺品図書写真はその一部であるが、それらは観測機材その他含めて、山本活動の生き証人として極めて貴重であり、またこの国の過去草創期天文学理解には欠くべからざる資料としても、検証が重要視されて今日に至っている。





中央天文台(月光天文台)と駿河湾遠望



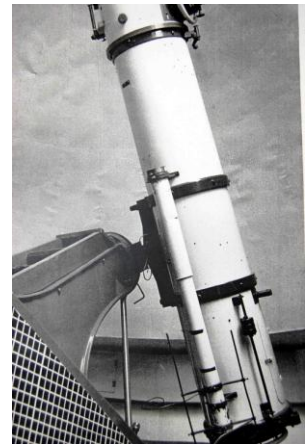
中央天文台・沼津市香貫山



山本博士講演・三五教団



天文祭り・沼津市



カルヴァー鏡 中央天文台



三五教団参加時の山本一清夫妻



岐阜天文台



山本博士と坂井義雄

以上の一連の写真は、三五教団と山本師との関係を物語る貴重資料である。沼津市山頂の天文施設と設置された望遠鏡その他である。山本師にとっては、自己の天文人生の最終章という意識と、日本の天文学により資するべく、背水の陣で臨んだと言ってよい。山本師の指導性は、日本各地に私立資本的なる天文観測所の設立を意図し、倉敷天文台をはじめ、岐阜金華山頂に地元天文同好の士により設置された岐阜金華山天文台も、その範疇に数えられた。岐阜天文台は戦後間もない昭和26年に、旧陸軍防空監視と気象観測を意図した建物を借り受け、岐阜市の自然教育及び観光政策にも資するべく、公的支援の下に活動が開始された。ここにも山本師は名誉台長としての指導性を発揮され、時折この写真のように、登山道を登ったという。このような経緯から、人生最後の大事な仕事が教団天文台協力の基本的意図だったことが伺われる。若き日にイギリス留学を経験し、公に対する民のイギリス的志向については、山本師は折に触れて語られたという。1946年以降、衆議院議員として社会党より立候補した事績も、それらの裏打ちであろう。

## (2) 山本博士と教団との意識乖離の経緯



アアナイ暦算局封筒印刷



封筒全体の体裁

上の写真は三五・アアナイ暦算局郵便封筒である。これは清水市の教団本部内に置かれた、いわば天文学山本研究室の開設といっても差し支えないであろう。東亜天文学会よりは、その主要メンバーでもあった天文研究者数名の参加もあり、特に当時盛んであった天体軌道論及び暦学関係の 学術貢献を目指したものであった。暦算局開設は 1957 年・昭和 32 年 1 月 5 日であり、この封筒を使用して、国内外の天文研究機関並び研究者に対し 3 月 20 日付の局長・山本一清名による日本語と英語表記の挨拶状が配布された。書状に記されたアアナイ系天文研究機関として、山本師は東亜天文学会の本部継承も考えておられたとも推量する。これは同天文学会の財政的困難さを解消するべく、その意図もあったと理解すべきではないかとも感ずる。



アアナイ教団にて購入された山本図書



山本文庫の表記・月光天文台所蔵

山本師と教団との関係において、避けて通れない当時の事実関係について、ここでは特に考察しておきたい。先ず如何なる事業でも社会的行動において当然予算が必要とされる。当時の教団と山本師の間には、実は、年間予算は 2000 万円という破格な金額が、教祖の中野師より提示されたという。亡父・坂井義雄の記憶ではあるが、その詳細等は詳らかではない。現代であれば、億の単位に達するであろう。果たしてこれが山本師とその周辺に下付された研究費のみに充てられたものか、または教団全体の天文機材整備費、その他の人件費等にまで及ぶものかは、今となっては想像の範囲を超える。恐らくであるが、やはりこの計上予算は、当面の教団天文全体に亘って当てられたものであって、当然山本師が自由に使ってよいものであったとは言い難いであろう。戦前の帝国大学関係の研究者には、湯水の如くの予算が相当の自由度を以って充てられたという。これが山本師の生涯つきまとった誤解の一端ともいえるようで、京都大学にカルヴァー 46 センチ反射望遠鏡を輸入するに当たり、会計の不明瞭さが重なって、その結果、山本師は大学を追われる立場ともなったと言う。教団との関係も同様な結果であったと考えられ、それが教団天文との齟齬の始まりとなったと言うのは、多分正しいといえるであろう。具体的な経緯証左としては、実は上記の写真『山本文庫』購入に始まる事案であったと伝えられている。当時を知る関係者いわく、「山本先生は、予算が自由に用途できることを勝手に解釈されて、あらゆる天体及びその関連の海外図書を次々と購入をされて、

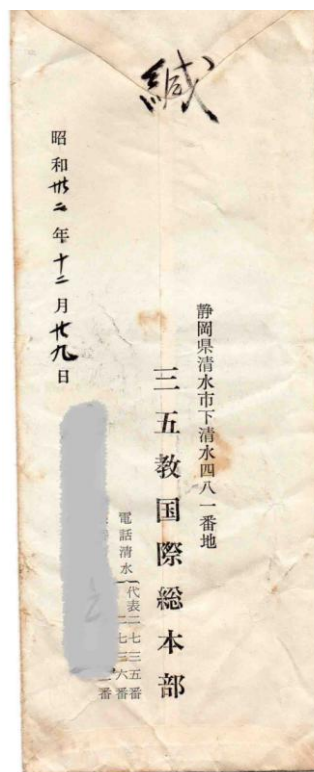


教団としては辟易し云々・・・」、それが直接的意思の疎通を欠く原因となったとその証言が呈されている。それも最近の指摘証言では、山本師は全く同じ洋書を数冊以上購入し、それを、自己の関係研究者等に無償で配布をしたとも言う。当時の為替レートからすれば、一冊 100 ドル程度のものであっても、固定相場制の当時からすれば、その数倍、即ち数万円の価格となり、仮に 5 冊購入すれば、その 5 倍の支払いとなった筈である。拙稿報告者も米国から「スカイ&テレスコープ誌」を高校程度から求めた経験があり、一冊あたり 1000 円以上だった経験がある。お小遣いも儘ならぬ身にとっては、両親は困り果てたであろうと汗顔の至りでもある。固定相場制など今は昔・・・、それは何を意味するのか、もうオトギ話でもあるが、経験者としては身につまされる。そして、事はこれのみでは済まされず、洋書輸入業者に、それらの余剰購入図書類は、到着後には教団担当者が購入キャンセルとして、その多くを返却したのだという。図書輸入業も困惑したに違いないと思われてならない。本稿報告者の本棚にも、古い数冊の天文洋書が眠っている。果たしてこれらは教団購入の一冊を、亡父は山本師経由にて入手したのではないのかと、容易に想像できるのは、果たして幸福なのか否か、自信は伴わない。

上記の事情は、教団との協力関係の当初から存在し、それは、暦算局開設当初の 1957 年・昭和 32 年 1 月より既にくすぶり始めていたようで、その証左としては、以下に紹介する教団運営責任者よりの書簡から窺い知ることが出来る。その驚くべき内容は、些か関係者の名誉にも及ぶことから、具体的な氏名等は判読困難処理をして、その全文を公開したい。この資料は、今は京大の花山天文台所有ではあるが、現在の後継機関たる月光天文台関係者の了承を得ての仕儀と思し召し願いたい。

書簡 ① 1957 年・昭和 32 年 12 月 29 日

三五教団責任役員書簡



前略

先生には途中恙なく此帰郷遊ばされたこと  
此推察いたします

就ては先生南め  
当三五天文台の<sup>及御算め</sup>為め此盡力下さり深く感謝申上げ  
次第です

次に過日來より數回に亘り私共の意思を此報告申上  
げたるに先生には此汲取り下さり返つて誤解され  
此立腹なされた事は實に遺憾に堪えません

而し之れも私達の不徳の至りと痛感しております  
度々と申上げた如く此教団運営上の喫緊問題から考  
察し先生方の此意思に到底添ひ兼ねる実状なれば  
不止得其の旨聞祖様に此伺い聞祖様の意を汲み取り

年 月 日

昭和 32 年 12 月末当時の三五教団信徒代表責任役員書簡その 1

三五教団天文台設置と山本博士との具体的関係は、昭和 31 年 10 月、教団代表の中野與之助教祖(与之助)の博士宅訪問から始まるという。そして既にその一年後には、双方の意思齟齬による、上記書簡内容の如く、両者の決定的決別に至った。山本遺品の一つとして、この書簡資料は大変に重要と位置づけられる。



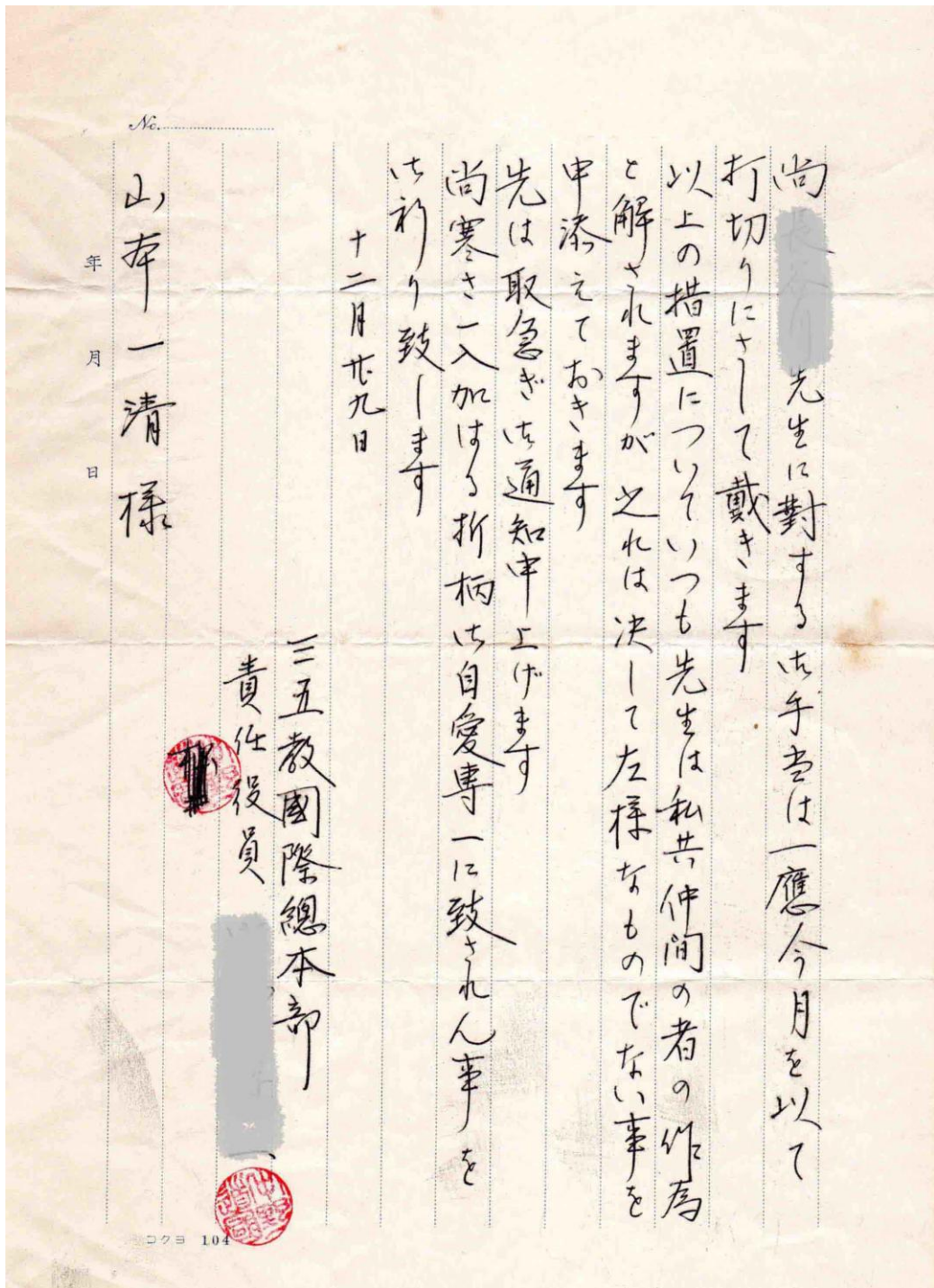
No. 2.

年 月 日

早々幹部会にて協議致し、ました結果、三五天文台及  
 曆算局は新春より数ヶ月間休止の外無之ことに  
 決定致しましたから先生には当方より改めてご連絡する  
 迄は自宅にて静養方をお願い申し上げます  
 申上くる迄もなき事なれ共休止中に於ける先生の  
 手当は従前通り送金させていただきます。  
 又休止中は研究に付て必要の節は望遠鏡・書籍等  
 指定下さるは届けさせていたゞきますからご連絡  
 致します。当休止期間中決して他より天文指導者は  
 招聘致しませんから此点も含み置き下さい。  
 前述の如き状況の故に先生も数ヶ月間当方より  
 連絡する迄は出勤を中止していただゞき度と思ひますから  
 其の旨先生より伝達方をお願い申し上げます

上記書簡その2

この書簡の2枚目は、具体的な内容が記載されている。沼津市の香貫山に設営された中央天文台(月光天文台)と曆算局の活動停止が示され、山本師の蔵書及び観測機材の返還輸送すら示唆されている。天文台落成は、僅か三ヶ月前のことであり、既に開台に向かっていた時期には、意識乖離と関係解消が始まっていたことを示唆する。また、観測機材返還に46センチカルヴァー反射は含まれていたのか、静養という記述も山本師体調不良を感じさせる。

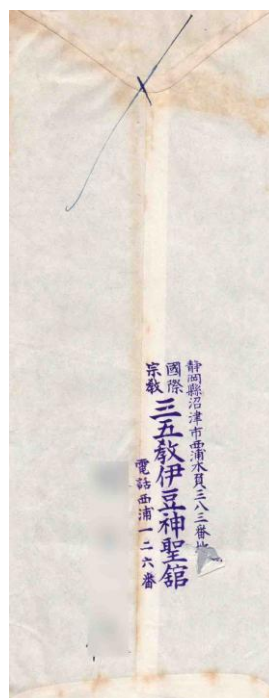
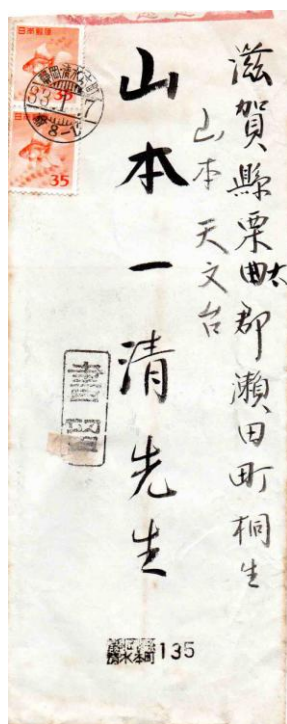


上記書簡その3

三五暦算局に参画した山本弟子のことについては、その立場の解消と支出された給与も停止が示されている。関係者の証言等では、その弟子と教団の軋轢もあった模様で、山本師と共に譴責を受けたと感ずる。この日を境に師弟とも退職に追い込まれたと考えられる。ただし、山本師には、給与は継続支給されたらしい。この信徒組織即ち「信者」諸氏の浄財が天文活動の基礎ということであろう。



書簡 ② 1958年・昭和33年1月7日 三五教団前責任役員書簡



教団の責任役員、即ち信徒代表者による上記書簡①は、昭和 32 年末に提示された。それに対して、山本博士よりは、何某かの仲介を願う書簡が送られたのではないかと推量され、それに対する回答が上記の書簡②である。この書簡内容も以下に開示する事とするが、その差出人は、上記①の書簡の差出人の一代前の責任役員の立場の方である。この方は、当時の法曹界にあって、永年に亘り弁護士として活動された人物であり、筆跡ならびにその内容も極めて温厚なる方で、相当の能力の高さを有した人物であったと窺い知れる。差出人の氏名等はこの書簡でも伏せる事とするが、差出寄留先は、清水市の教団本部ではなく、沼津市の海岸べりの自然豊かなる内海に位置する「三五教伊豆神聖館」という施設から送られたものである。本稿報告者の坂井義人も、幾たびか訪れた迎賓館的施設であり、今は古くなったとはいえ、関係者の宿泊等に運用されている。因みに、野尻抱影氏も、講演会招請の折に訪れており、この時の逸話は、野尻氏の著作にも短文として著されている。(星三百六十五日夜の「教祖様」11月22日)

この書簡の日付のほぼ一年後に、山本師は逝去され、そしてこの弁護士の方も、その十ヶ月後程度(昭和 34 年秋)に、他界されたと聞く。慮るに、山本師とこの先代の責任役員とは、共に学識等の高さから、互いに尊敬の念を抱いたものと思量され、山本師の立場と心境に対して、相応以上の理解度を示していたと観せられる。ただし、既に信徒団体代表の職から退いた時期であり、後進の些か硬派と言って良いか、全国各地より参集していた地域代表者の多数から、山本師は譴責をされて、この前職の代表者にもそれを押し留めることは不能だった模様でもある。ある意味、これは念を残す結果となったことは、惜しむべきことだったかも知れない。また、これ以外にも、特別な宗教的位置付けをされていた三五教団九州地区の施設にも、中央天文台(月光天文台)に次いで、天文観測施設を建設するという問題も表面化していた様相で、これも含めての信徒団体との軋轢を生ずる起因となっていたと推量される。坂井亡父も関係したと聞く。



拜啓 此手紙拝見致しました。新春を迎えられ益々  
 此元氣の趣き何よりの事と此喜び申上げます  
 實は教団の運営は約二年以前から中野  
 以下数名（私を除き）の幹部が担任して居りまして私は  
 直接関係しないことになつて居ります。此が洵に遺憾な  
 り旧冬来、天文関係に付きましては、右幹部と先生五  
 氏の間には不和を来たして居りまして、本年元旦に集ま  
 りました各地の主會長、其の他を加えての會議に此事が協議  
 せられ全面的に幹部を擁護する氣勢強く揚り従來の儘に  
 進むならば、天文台を解散する外途なりと主張するものも續  
 出し今のところ之を抑え様もない実情でございます。  
 結局昨年末幹部が差上げました手紙の通り、天文台  
 一時休止のやむ得ないことになりましたのですか。開祖様五

年  
 月  
 日

昭和 33 年 1 月初当時の三五教団前信徒代表責任役員書簡その 1

この書簡は、上記①に続く、一代前の信徒代表責任役員よりの山本師宛のものである。弁護士を生業とされた方で、文面からしても温厚なる人物と観せられる。山本師が教団側と決定的な近い離反状態に陥り、年末とも重なって郷里に戻り、教団側から決別的書簡を受け取って、それに照らし合わせ、この前代表役員に対して教団側との解決仲介を依頼したものではと思われる。教団開祖に対して沈静化を願ったものではと考えられるが、その困難さが伺われる。

乙

私と致しませうても此の意向を一概に無視し難い実情で  
 ございます。之は来る節分祭に全国の信者が集ります機  
 会に此の打聞の道を講じ度いと思ひます。それまでは  
 開祖様も私も先生とは相談申上げても無駄に終り打聞の  
 途かないものと思ひます。何卒万事節分後のことには  
 申度いと存じます。尚申上げらるるまいことですが御仕事  
 の後片付け、お持物の整理等の為には本部へお越し下さる節は  
 幹部の許可なくしては自由に本部並 天文台、木負等  
 には出入りが出来ないことに決められて居ります。お出掛け  
 下さる日、並には滞在の日数を前もってご通知されば私より  
 お返事申上げます。私不在でも判る為めにその書状は持  
 参り下さい。先生の御氣持からいろいろご理解の出来兼ね  
 ぬる節が多々ありますと思ひます。が緊迫の事界情勢下に

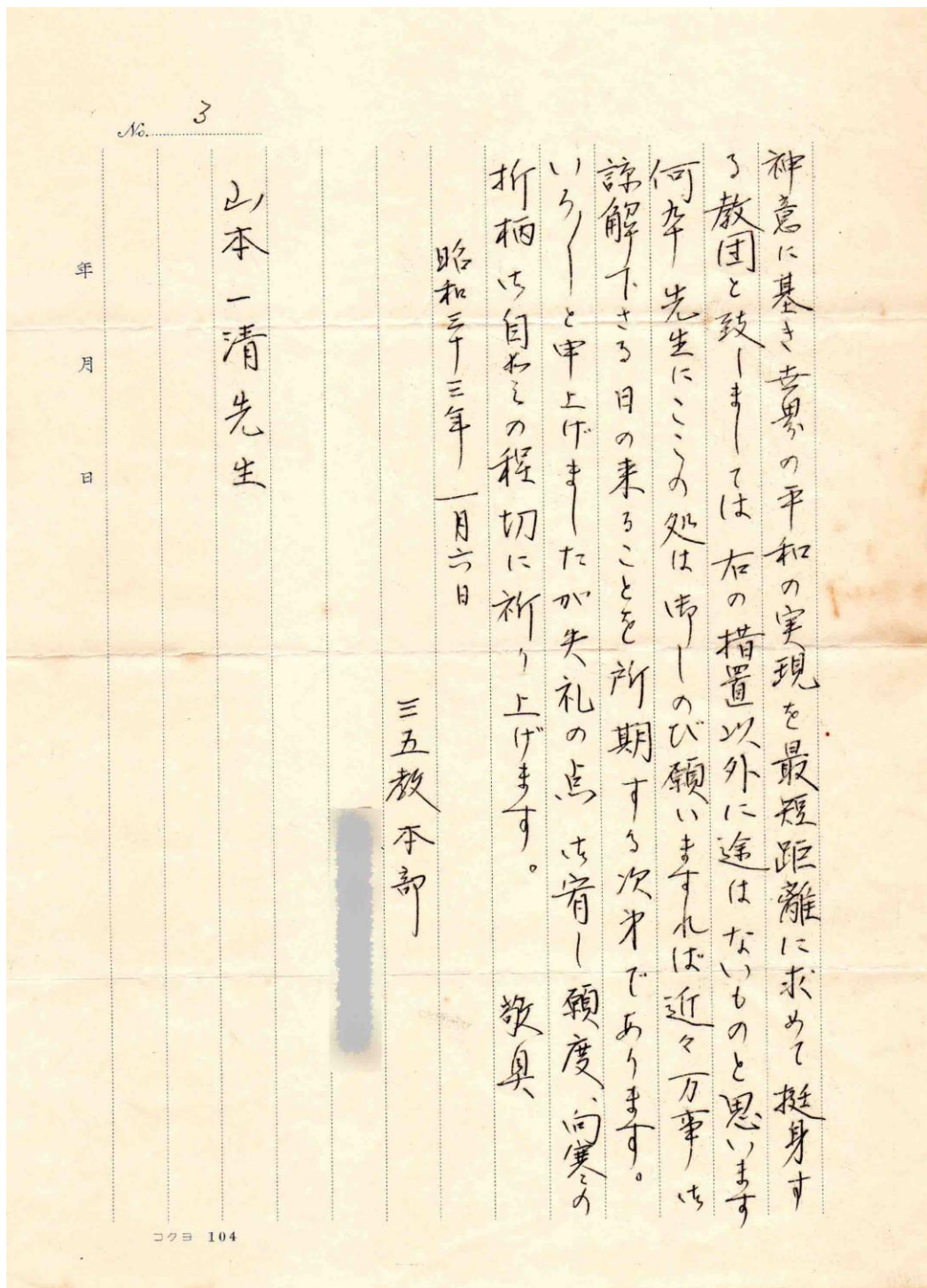
年 月 日

コクヨ 104

上記書簡その2

書状の二枚目では、事態收拾に向けての困難さが語られている。一見、既に関係は解消とも取れる内容となっており、清水市の本部暦算局、中央天文台ならびに、木負(地名: きしょう)の神聖館施設など、全ての施設の出入り禁止にまで言及が及んでいる。しかし、46センチルヴァー反射望遠鏡機材についての返還等の判断は無く、矛盾に及んでいる。節分際の折の判断結果については不明。山本師は関係修復を期して、望遠鏡は貸与継続を判断したと思われる。





上記書簡その3

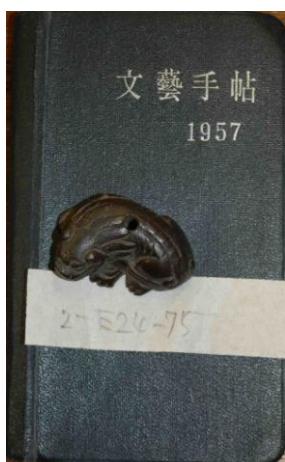
三五教団は、天文を支柱とし、日本の戦後復帰の精神的育成を図った団体である事は確かであろう。「世界平和の実現」と自己評価した点も、後の政府開発援助に先行し、発展途上国支援 OISCA Intetrnationl (通称オイスカ)に継承された。星の文化は国力成長と精神的豊かさを象徴し、海外支援は戦後贖罪を意識させる。かかる価値観を示した宗教団体は、他には見られない。



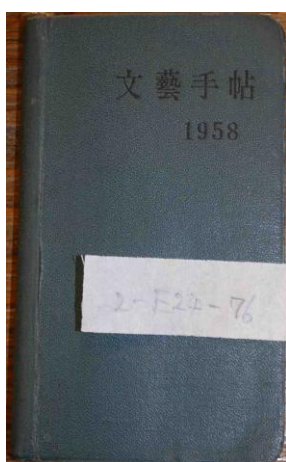
#### 4、晩年の山本手帳の紹介

山本師は日々の活動に際して、ポケット版・文藝手帳(文藝春秋新社)を永年活用していた。それらも京都大学に寄付されて、その全てが保管されている。一年を通しての山本師活動を知るには、極めて貴重な資料である。報告者の坂井は、亡父の永年の疑問を受けて、特に昭和 32 年以降最晩年に至る二年について、その複写をさせて頂いた。特にこの二年間は、三五教団との天文活動についての行動記録等を俯瞰するには、最適でもある。日々の日記は残されていないと言われ、唯一その代わりに資料とも考えられる所以ある。

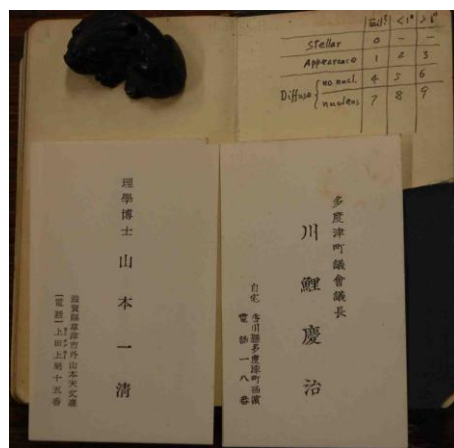
以下、二年に亘る記載内容を示す事とするが、主として三五教団中央天文台関係等を紹介する。また東亜天文学会関係者他の交流も含めての内容は、興味深いものと思われる。



昭和 32 年 手帳



昭和 33 年手帳



昭和 33 年手帳末尾の名刺

(白い付箋は、京都大学山本資料整理分類番号を示す)

#### 手帳① 1957 年・昭和 32 年の山本手帳記載内容 (昭和 31 年末一部含む)

参考記述 昭和 31 年 12 月教団関係

- ・ MEMO 部分 ` 霊界から見た宇宙 `
- ・ 12 月 08 日 開祖入洛、根上、松井両氏入洛(教団関係者の京都訪問・坂井注)
- ・ 12 月 20 日 原田三夫氏来館(教団施設来訪か・坂井注)
- ・ 12 月 22 日 東京出張帰沼
- ・ 12 月 23 日 英子沼津行 (山本師ご令室・英子夫人・坂井注)
- ・ 12 月 24 日 木負敷地調停裁判 (沼津市木負は地名、接待施設敷地・坂井注)
- ・ 12 月 27 日 帰桐 (山本自宅へ帰宅・坂井注)
- ・ 12 月 28 日 アナナイ総領来宅 (四人) 三人泊
- ・ 12 月 29 日 沼津へ書物 5 箱積み出し

#### 1 月記述

- ・ 05 日 研究所奉告祭
- ・ 06 日 8: 出発 沼津へ 香貫山 牛伏山 14: 木負へ (船で)
- ・ 07 日 暦算局研究開始
- ・ 08 日 丸善来清
- ・ 10 日 8:00 清水○上京 (長、古、山・略記載氏名・坂井注)  
開祖岐阜へ 13:20 英子帰西 夜: 長谷川 古川 帰西  
21:00 清水帰着
- ・ 14 日 京都駅で(長谷川 古川 他) 四人会食

- ・ 16 日 7:50 村井氏草津着(教団役員 村井利弘氏・坂井注)
- ・ 21 日 在宅
- ・ 23 日 丸善来清

## 2 月記述

- ・ 02 日 前夜祭
- ・ 03 日 節分祭
- ・ 06 日 10: 道場着
- ・ 07 日 9:30 ~ 10:30 講演(信徒へ) 暦と天文
- ・ 08 日 10:0 ~ 11:00 宇宙(講演会・坂井注) 11:30 ~ 13:00 歓迎会
- ・ 10 日 18:50 開祖 久留米駅で欠送り 19:30 一条道場へ帰着  
@ 2 月 10 日頃より 19 日まで、九州から帰路途上 各都市等の立ち寄り記載
- ・ 19 日 21:08 帰清
- ・ 21 日 19:08 英子帰清
- ・ 23 日 18: 月並際 [生と死] (月次祭・つきなみさい・教団毎月神事・坂井注)
- ・ 27 日 帰桐
- ・ 28 日 上洛(宮本氏)

## 3 月記述

- ・ 08 日より四国各地と倉敷 大阪方面講演等
- ・ 10 日 10: 香貫山地鎮祭(中央天文台建設地の地鎮祭・坂井注)
- ・ 14 日 春季大祭
- ・ 25 日 清水
- ・ 27 日 沼津電話局講演

## 4 月記述

- ・ 05 日 19: 棕平来清(7 日去る・・地震前の特殊虹の存在を主張・坂井注)  
@ 7 日夜 地震(鹿児島沖)(5:25 棕平?・棕平虹の記述か・坂井注)
- ・ 09 日 英子帰清 村井氏岐阜行き 神田茂氏来る
- ・ 10 日 木負行
- ・ 12 日 上京 丸善 Planetarium 村上 中島 日米商会 21:50 帰清
- ・ 13 日 関勉 古川麒(一郎) 来清
- ・ 14 日 遠州道場(二又)
- ・ 15 日 香貫山へ
- ・ 16 日 Arand・Roland 彗星探索
- ・ 17 日 五藤夫妻来清(五藤光学社主・・坂井注)
- ・ 18 日 12: 香貫山へ(五藤氏と) 18: 観測開始祈願式
- ・ 19 日 24:45 開祖出発(四国九州へ)
- ・ 23 日 月並祭(月次祭) 講話

## 5 月記述

- ・ 03 日 (人工衛星時代来る)
- ・ 07 日 小島修氏来清(小島修介氏?・坂井注)
- ・ 08 日 小島氏去
- ・ 11 日 13: 人工衛星全国集会 20:30 Osaka Hotel
- ・ 20 日 五藤の蒔田氏と会 五藤氏に泊

- ・ 21 日 快晴 12:20 Numazu 13: 香貫山上棟式 22: 清水へ
- ・ 26 日 研究室の変更
- ・ 27 日 10: 静岡へ買物に行 13:神田氏来訪 19:道場講話(ひさかた)  
21: 誕生日祝会
- ・ 31 日 10:30 国際美術展 14: 丸善

#### 6 月記述

- ・ (奈良班結成式・人工衛星観測か・坂井注)
- ・ 01 日 14: 五藤(蒔田氏来清)
- ・ 02 日 小森幸正氏来訪
- ・ 10 日 10: 近江漏刻祭
- ・ 16 日 13: 流星委員会(四ツ橋)
- ・ 27 日 14: CBC 録音(中部日本放送・坂井注)

#### 7 月記述

- ・ 01 日 大沢君来泊(火星観測者・大沢俊彦氏・土星斑点発見者・坂井注)
- ・ 04 日 清水行
- ・ 12 日 13:30 Shimizu 15: Numazu 登山
- ・ 15 日 14:0 西村繁氏来
- ・ 27 日 長谷川君帰清
- ・ 28 日 三谷氏 台湾講話

#### 8 月記述

- ・ 03 日 大祭 英子帰清
- ・ 07 日 静岡人工衛星結成
- ・ 28 日 岐阜で衛星球(人工輝球を衛星に見立て観測訓練・岐阜天文台・坂井注)

#### 9 月記述

- ・ 01 日 12: Shimizu 13:30 登山 18:20 Numazu 19:20shimizu
- ・ 03 日 13: 登山
- ・ 07 日 清水祭 登山 塗装開始 食堂上棟式 21: 沼津発帰清
- ・ 09 日 坂井氏帰静 17:Numazu 18:帰静
- ・ 10 日 登山
- ・ 13 日 福井実信氏来訪 村井氏と話す(教団職員) 18:14 貫 600 匁(体重らしい)
- ・ 17 日 5:58 Shimizu 6:50 Numazu (西村繁同車) 登山
- ・ 18 日 在静
- ・ 20 日 10:登山 17: 神輿登山(香貫山頂にて教団の神輿神事・坂井注)
- ・ 24 日 落成式 13:~(香貫山・中央天文台落成式と思われる・坂井注)
- ・ 26 日 16: 沼津医師会講演
- ・ 29 日 木負へ

#### 10 月記述

- ・ 01 日 9: 磯野夫妻香貫山へ 13:13 磯野夫妻アタミへ 15: 登山 18: 慰労会
- ・ 02 日 風邪気
- ・ 03 日 就床
- ・ 04 日 16: 散髪 19: ドイツ人 2 人着会議出



- ・ 05 日 12:08 Simizu to Numazu
- ・ 06 日 14:50 Numazu to Shimizu
- ・ 14 日 帰桐
- ・ 15 日 16: 山田医方へ(検診らしい・・・坂井注)
- ・ 16 日 在宅
- ・ 20 日 在宅 草津一家帰省
- ・ 21 日 19:08 Shimizu
- ・ 30 日 木負へ
- ・ 31 日 13: 野尻氏 ` 星と人生 ` 17: 野尻氏去

#### 11 月記述

- ・ 01 日 成子老母死去 事務机を設備 19: 月次祭 村井・坂井 帰静
- ・ 03 日 成子老母葬式
- ・ 04 日 12:32 清水発 15:11 熱海着 22: 長谷川一郎 坂井よ志男(義雄) 来宅
- ・ 05 日 9:30 松井氏来 14:30 去る(坂井氏も)
- ・ 06 日 帰宅
- ・ 07 日 10:30 近海神宮 14:入洛
- ・ 08 日 8:30 英子清水へ
- ・ 09 日 上洛 22: 英子帰草 23: 帰桐
- ・ 10 日 15: 古川来訪 18: 長谷川帰来
- ・ 11 日 天界発送
- ・ 14 日 坂井氏来桐
- ・ 20 日 18: 長谷川氏来泊
- ・ 30 日 8:30: 同志社中学(宇宙時代来る)

#### 12 月記述

- ・ MEMO 部分 1) 宇宙時代の性格(科学上) 2) 宇宙時代の性格(思想上)  
3) 宗教の占める位置 4) 人間のあり方 5) 現在の宗教界の任務
- ・ 07 日 14:00 Okazaki
- ・ 08 日 OAA 総会(東亜天文学会・坂井注)
- ・ 09 日 長谷川氏来泊
- ・ 13 日 Shimizu
- ・ 15 日 木負より香貫山へ
- ・ 25 日 清水滞在
- ・ 26 日 天界発送
- ・ 27 日 18: 帰桐 英子は南座 草津泊・
- ・ 28 日 14:30 英子と章 帰桐
- ・ 30 日 長谷川 神戸隆 来 餅つき
- ・ 21 日 14: 大阪 18: 神戸  
(@ 巻末の数ページに及ぶ英文等の備忘記録は割愛する)

#### 手帳② 1958 年・昭和 33 年の山本手帳記載内容

##### 1 月記述

- ・ MEMO 三五教天文大会(10 時頃) 人工衛星全国委員会(下旬) 中央天文会(15 日)
- ・ 11 日 病臥
- ・ 12 日 病臥
- ・ 暮らしの手帳へ 7 枚

- 16日 錦織氏(近江兄弟社) 来
- 17日 長谷川氏来泊
- 18日 14: 大阪 OAA 例会(人工衛星、日本天文学史)
- 19日 帰桐 大沢君来泊

#### 2月記述

- 01日 13:30 科学史会
- 09日 (岐阜天文同好会)

#### 3月記述

- 08日 17: 名古屋 OAA
- 09日 11:~15: 暦学会(熱田)
- 21日 山科天社で作暦会 牧田 端本 長谷川 神田 山本
- 26日 三五教(佐々木 森下) より書物運搬し来る
- 27日 18: 長谷川氏来泊

#### 4月記述

- 4月 関西方面・大阪から、広島 中津 鹿児島 指宿 大分 長崎 天草  
熊本の各地遊歴訪問及び講演等長期旅行 5月20日に帰桐
- 17日 14: 長谷川氏かご島行 17: 上忠敬氏電話連絡
- 18日 13: 長谷川氏帰来(種子島より)

#### 5月記述

- 03日 20: 帰桐
- 04日 12:40 須川力氏来訪
- 12日 16: 長谷川氏来台(山本天文台・坂井注)
- 17日 大阪 OAA ` 現代〇天文学会 `
- 20日 16: 村山定男氏来泊
- 21日 9: 村山氏去 10: 英子大津へ

#### 6月記述

- 初旬 中部地方遊歴
- 07日 在宅
- 11日 Oumi 神宮へ
- 21日 Osaka OAA ` HYADES group `

#### 7月記述

- 04日 毎日放送
- 09日 火星委員会(西村)
- 12日 風邪
- 13日 天界七月号発送
- 14日 大阪 OAA 大沢母(君子) 来〇
- 24日 PM 研究室掃除 雷電で停電一時間
- 28日 6:45 大阪 川添、島津氏等と会談 15:30 帰桐

#### 8月記述

- ・09日 PM 天界発送
- ・23日 14: 大阪 OAA

#### 9月記述

- ・03日 12:45 佐々木一二氏 来泊
- ・12日 14: 大雷雨
- ・14日 11: 京都郵政研修所来訪
- ・18日 Wilson 歓迎、火星会(花山)
- ・20日 14: 大阪 OAA 例会
- ・24日 12: 英子草津行

#### 10月記述

- ・05日 9: 神道央示会
- ・11日 11: 坂井氏(岐阜) 来宅 17: 長谷川氏(神戸) 来
- ・18日 14: OAA 大阪例会(アラビア天文学 第2回 月 Rocket)  
20: 帰桐(木辺氏同車)
- ・19日 草津一家帰省
- ・23日 11: 中野武雄氏来宅 PM 倉敷模様変へ(何を意味するか?・・・坂井注)
- ・24日 英子臥床

#### 11月記述

- ・20日 草津川源の青年たち来訪
- ・27日 皇太子妃発表
- ・30日 総選挙

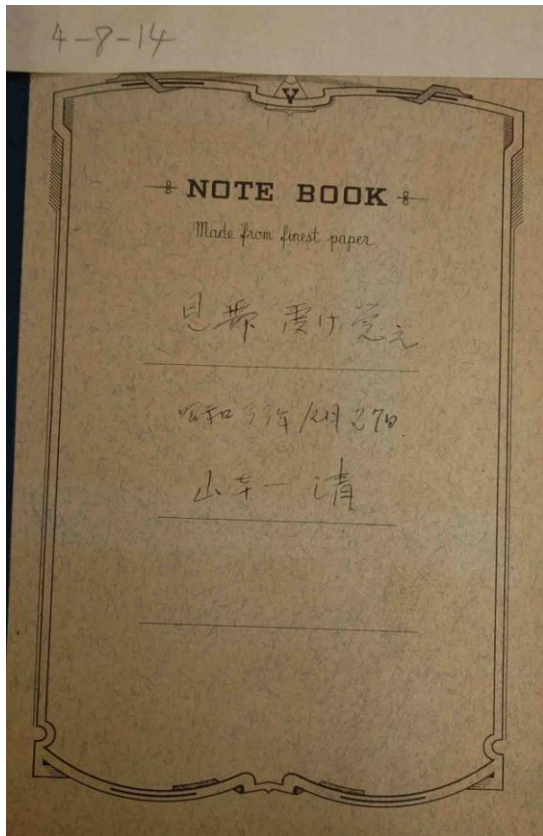
#### 12月記述

- ・01日 守山校長来(湯木氏)
- ・03日 9:04 豊中行
- ・06日 村上来宅
- ・07日 OAA 総会  
(1、三回の総会 2、役員改め 3、会費 4、表彰 5、人工衛星 火星)
- ・11日 16: 福井新聞 山本幸男氏来
- ・12日 18: Dr,Sugie come (主治医 杉江医師)
- ・14日 野邑夫妻帰郷
- ・18日 10:40 to Dr, Sugie (主治医 杉江医師)
- ・20日 08:40 to Dr,Sugie 14: 大阪 OAA
- ・22日 12:20 to Dr, Sugie(主治医 杉江医師)
- ・25日 草津 Xmas
- ・26日 14: 岡本教会
- ・27日 15: 小松 杉江 両医師来診)・・・逝去直前自筆ノート参照 (坂井注)
- ・28日 佐伯氏より見まい電話 茅知、秋田両氏より見舞

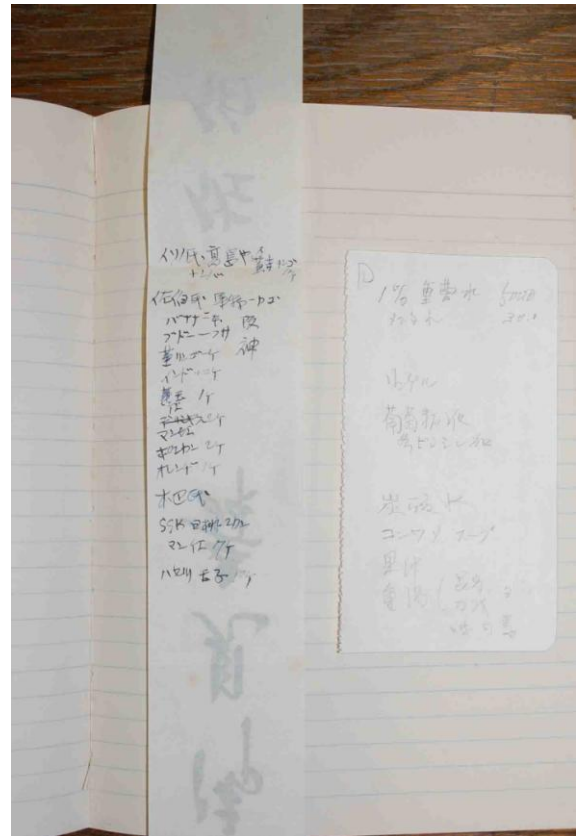
以上、山本師の自筆の二年間の手帳である。昭和32年の当初から、教団との天文台設置計画の下、その多忙さが伺われる。しかし最晩年は、本来の東亜天文学会の活動に戻った事が伺える。その12月には病魔の医師検診の記述も見られ、辛い最晩年であったと言えよう。

## 5、逝去直前の自筆ノートを紹介

山本師直筆の逝去直前ノートを紹介したい。『見舞受け覚え』・昭和33年12月27日の日付と山本一清と記されたものである。内容は、山本師の病魔自己評価3ページと、見舞い者芳名及び見舞いの品の記録である。特に見舞い品の具体的リストは、ノート記載のものと、札紙の裏側にメモしたのも、その一項として貼り付けられており、なんとも印象深い。これらの日々を過ごした先生は、翌年の1月16日未明、逝去された。享年70歳。



山本ノート 昭和33年12月27日付



見舞い品リストの一部

山本師の病魔については、このノートに3ページに亘り、詳述されている。具体的には是非以下の自筆文章を判読して頂きたい。病名は胃癌と記されていて、そして肝臓への転移までも記されている。そのような病状に至るまでは、何某かの症状もあったはずであろう。ましてや、昭和33年の一年間は、三五教団とその天文施設等との指導的立場も離れていたと、山本手帳からは推論もされる。しかしそれでも山本手帳には病魔のことは殆ど記されていない。ただ、12月の中旬となって、Dr.Sugie (杉江医師) の来宅診療等が記されるのみである。ただし、時折手帳には「注射」との記述もあり、それとの関連はいかばかりだったかは、知る術もない。また、以下に詳述をするが、もう一名の医師「小松博士」と田中医師の名が、見舞い受け覚えのノート記録には、突然に現れてくる。そしてこの山本ノートの3ページ目には、その小松医師の診断告知と、辛い言葉ではあるが引導を渡された如くの病魔結論が記されている。これらは、いくら山本師が東亜天文学会等に多忙なるとはいえ、元々は江戸期末頃から村医者の家柄でもあった山本家としては、端からは理解しがたい結末でもある。果たして何時頃に癌診断が示されて、山本師がそれを自覚されたのか、不思議でならない。そのような意味合いで、以下をお読み願いたいと願う。また癌告知ということが既に存在したことに、驚嘆の思いを感じる。





即座して再度右腕に行き、七時までの急診で帰す  
急診室で腕の麻痺甚だしく歩行不能に成り、  
大急ぎに呼び戻す。

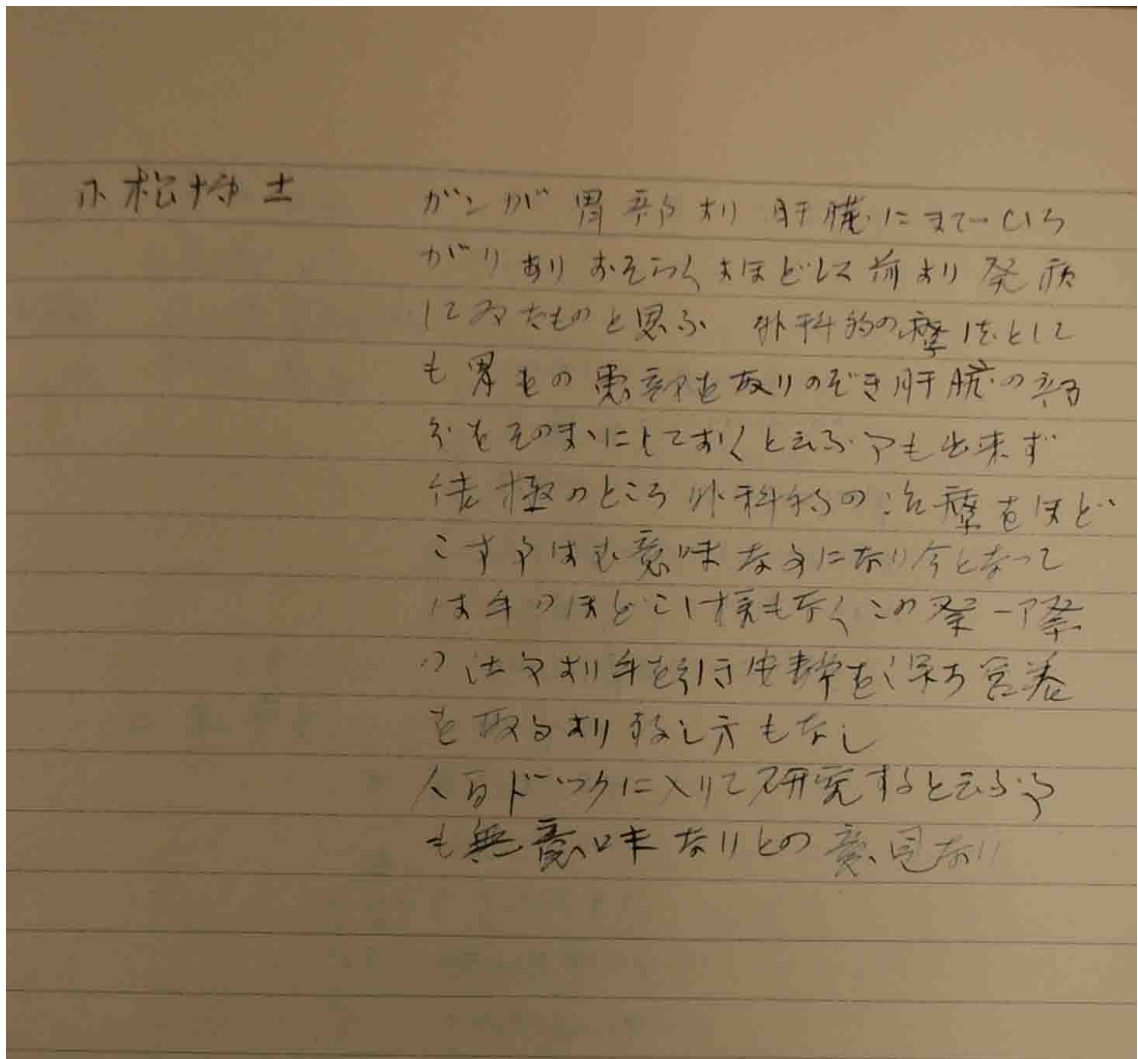
この日、田中、一軒のしたま、席につく

夜、クリスマス会をやつと、お世帯につきしも苦しい  
26日、早朝、田中医師をむかへ、診察もこいしかつ  
肝臓にうたがひあり、肥大型の肥太のみにあらず  
肝臓も拍子にはれてゐる、肝臓におつと、これ  
腫れが腸にほれ、胃中にもほれる故にかにかく、酒後味  
がほれるのを、と申される。一時も早く、田中、大学の  
先生の河さつも、気はれ、手書されるか、と、かゝる、と、申す。

十一時、杉江医師をむかへ、二十四日、来る、を話し、(田中医師の  
来診は、ふせ、と、いふ、一人、の、ドック、に、いふ、は、別、として、この、際、  
一、部、小、市、に、杉江、の、来診、を、乞ひ、たい、と、相、談、する、を、医師、  
より、日、幸、小、松、博、士、に、電、話、して、下、す、その、結果、田中、27日、  
午、前、二、時、あり、三、時、迄、の、間、に、来診、下、す、と、いふ、される、  
28日、午、前、三、時、杉江、医師、来診、胃、部、に、い、ち、み、あり、  
か、た、い、と、ころ、か、ある、故、胃、がん、の、た、が、ひ、を、引、と、申、す。

山本一清ノートの2ページ目

同ノートの2ページ目の記載は、病魔についてである。この記述からは、診断内容が伺われ、次ページの小松博士は癌専門医と思われる。胃癌可能性を示唆された。



山本一清ノートの3ページ目

### 小松博士

ガンが胃部あり肝臓にまで広がりありおそらくよほど以前より発病してゐたものと思ふ 外科的の療法としても胃とその患部をとりのぞき肝臓の部分をそのままにもしておくこと云う事も出来ず 結極(局)のところで外科的の治療をほどこす事は無意味な事になり今となつては手のほどこし様もなくこの祭一際の仕事より手を引き安静を保ち營養(栄養)を取るより致し方もなし 人間ドックに入りて研究すると云ふ事も無意味なりとの意見なり

@ 昭和34年・1959年1月16日 逝去 享年70歳

@ 戒名： 摂取院一星 (真宗木辺派・木辺成曆・宣慈)

(因みに、摂取院一星は、ブラックホールを思わせる)



## 6、結語に代えて

以上が晩年に至る山本一清博士の事績である。この拙報告には、本来公表を控えるべき書簡資料類と、山本師自筆のノート類も含まれる。この点を先ず関係者全ての方様に、ご寛容を願いたい。どうか、これらをお読み頂き、その心情等をお汲み取りいただければ、山本師も瞑目されるのではないかと信ずる。あくまでも私見ではあるが、報告者としての感慨を以下述べることもご容赦願わしい。

人の生き様というのは、最期を過ごした日々に現れるという。しかし山本師の場合は、全てが精力的、そして立ち止まるという時間的余裕も見出せなかったのではと、結論される。いくつものテーマを抱えつつ、その最期を迎えたと言って良いであろう。具体的に記すと以下の残余課題と言って良い。

- ・ 三五教団との関係修復の課題
- ・ 東亜天文学会・OAA の将来像
- ・ そして山本天文台の将来像
- ・ 三五教団香貫山中央天文台に残余のままとなった「カルヴァー 46センチ望遠鏡」の扱い

これらの課題のうち、最も重要なのは、やはり教団との関係修復であったろうと思われる。教団天文台が山本師の指導を前提として、再出発していけば、全てが理想的に推移した筈と判断されるからである。しかし、それは山本師の病魔によって絶たれた。亡父・坂井義雄の証言によれば、山本師は「・・・いずれ教団は迎えに来るよ・・・」と、語っていたそうで、案外気にしていなかったのかも知れない。しかし、別儀の事として、山本師は「坂井君・・・ボクは世間知らずだったよ」とも言われたといい、これは多分、京都大学時代を背景とした述懐とも言えるもので、その晩年をして駆け抜けた教団との関係においても同様の結果であったと言えるかもしれない。元々は教団との関係は、「・・・この山本だから協力するのであって、他の誰もしないだろう」と語られ、それが自信の裏づけであったとも言えよう。望遠鏡は返還を求めなかったのか、逝去の後に山本天文台に返還復帰された。そして、東亜天文学会の財政との兼ね合いから、岐阜市の富田学園高校に、亡父仲介により売却された。英子未亡人は、この資金を以って財政健全化を図られ、木辺成磨氏その他の会員に運営を託されて、同会は今に至っている。どれほどの会員諸氏が、この顛末を知るかは詳らかでない。勿論、教団天文との関係は終焉し、山本天文台も事実上の終息化の途を辿り、また、東亜天文学会は、全国的アマチュア一団体として、その使命と山本思想は、NPO 法人として継承され今に至っている。

教団天文施設としては、中央天文台(月光天文台)を中心として、驚くことに全国各地に天文観測施設の設置が続けられた。その概要は、写真資料のほか、特に五味政美氏と中島英雄氏提供の自筆資料を参考に供していただきたい。また、他界された山本師の後継として、幾人かの天文研究者が、その後継を務めた。これについては、別の機会に譲るが妥当と思われるが、静岡県浜北市に中野学園「天文地学専門学校」が各種学校とはいえ、設立された。その後この各種学校は、発展的に姉妹組織のオイスカインターナショナル傘下の「オイスカ高等学校」として、正式なる学校教育に転進した。教団としての活動は、天文と開発途上国支援組織に派生したとはいえ、これらは、独特の宗教性の発露として、拙稿報告者には十分に理解できる事でもあり、それぞれ社会的意義の元に活動が継続されている。

なお中央天文台は、地元自治体との意識乖離もあり、昭和 1975 年・昭和 50 年に静岡県田方郡函南町に移転を為した。名称は正式に「月光天文台」と呼称され、平成から令和の時代に入り、躍進を図っている。現在は公益財団法人格、また正式なる博物館としての衣替えに至り、新たな挑戦と模索を続けている。欧米には、「自然史博物館」と称するスタイルの専門研究博物施設が多く存在する。日本においても同様の思考に基づく研究的施設も出現し始めた。一言で言えば、月光天文台には、その途を歩む義務があると結論付けられよう。

さて、山本一清博士の晩年評価に戻ろう。紹介した山本師の手帳には、「霊界から見た宇宙」(昭和32年山本手帳)という記述が見られる。この記述は、記憶が曖昧ではあるが、三五教団の発行図書に由来するものだったかもしれない。手帳の記述月日としては、付録的な前年の部分の昭和31年12月第一週あたりの事であり、これは教団との協力関係が成立直後の事でもある。「霊界」と「宇宙」の関係を、山本師にはとっては驚きを以って迎えたのか、または我が意を得たりであったのかは、明確ではない。しかし元々、宗教に立脚した総合的な学問体系を模索したらしいということが見え隠れしていた同博士には、教団天文台の活動の指針として理解したのではと、報告者・坂井義人は考える。因みに、山本師は亡父・坂井義雄の質問に対して、「・・・ボクは、天文学者になっていなければ、神主になりたかったのだよ」と答えたとも言う。果たして青春時代のキリスト教徒洗礼を経た同師には、この矛盾をどう考えておられたのだろうか。過ぎたる解釈ではあるが、一神教の欧米社会の柱たるキリスト教に対して、その限界を感じた山本博士は、新たなる展望の下に、神道という体系を問い直そうとされたとも言えそうな気はする。

翻って、少し山本師の心情を推論して、つまらぬ空想科学的世界から、その解釈を試みたい。余りにも稚拙なる展開たることは、前以ってご容赦願いたい。21世紀に入ってから天文科学と物理学の発展は、既に恐ろしいというべき世界に足を踏み入れつつある。素粒子論から宇宙生成までの論は、誰しも驚くばかりであろう。特に物質の最小単位としての量子という概念は、光から電子その他までを含むという厄介者で、せいぜい「光は粒子であり、波動の性質を持つ」という程度の知見のみを、拙愚程度は知るのみである。20世紀初頭に既に量子力学が生じて、今世紀にはその応用たる量子コンピュータの実現も視野に入りつつあるという。「量子もつれ」と称する現象は、かのアインシュタインすら、「不気味な遠隔作用」とも語ったと聞く。そして最も遺憾と言うべきなのか、眉ツバものというべきか、量子論で生命現象、そして靈魂の存在を是として、その現象説明も可能と主張する学閥派も存在するらしい。結論を急ぐ必要はないが、果たして物理科学の一端は、そういう方向性を求め始めたのかと、当然懐疑的ではあるが興味深い。そして山本師と三五教団との関係を省みた場合、現実世界宇宙と神界の表裏一体の関係性を問う立場が宗教界とすれば、現実世界を扱う天文科学は、どこかで神界・霊界などの目に見えない世界をもその守備範囲に入ってくるのではないか・・・。天文科学 = 現実世界 vs 宇宙  $\leftrightarrow$  宗教 = 宇宙 vs 神界、その関係性の構造は天文科学  $\rightleftharpoons$  宗教界となって来るのであろうか。意味のなさぬ展開はこれ以上はしない事としたい。山本一清博士の教団との関係は、以上のようなものであったと一応推論したいと思う。そして逝去前の一ヶ月は、既に述べように、教団との関係再構築、生みの子たる東亜天文学会の行く末、また中央天文台残置のままの望遠鏡及び自己の手遅れの癌病魔、そのいずれもが手詰まりのままであったであろう。そして「見舞い受け覚えノート」に記された内容は、おそらく同師の最期の手記であったに違いない。如何にお寂しいお気持ちであったか、死を待つ身のご心情は到底慮るに忍びない。拙稿報告の坂井義人も、余りにも陰鬱なる辛さが込み上げて来る。このあたりで、山本博士論証は、もう限界に近づいてもきたようである。報告者・坂井も病魔を幾度か経験し、そして何と山本師の教団協力時の年齢にも至った。わが身に照らしても、到底そのご心境には及ばぬものの、お気持ちの一端は理解できたような気もし始めた。果たして今後何をなすべきかを呻吟する。

この際、山本博士のご遺志の一端と、亡父・坂井義雄(誉志男)の師を畏敬する心情に照らし、何某かの『天文奨学金』設定の寄付行為をなして、せめて師弟の名を世に継承して頂く方途に向かうべきかと思う。実現の可能性に向けて、今後検討を始めた。その折には現在の月光天文台にその受け皿を担っていただくが理想と考える。職業天文家、天文アマチュアを問わず、より学問発展の素地を願うのみである。山本一清博士の志ここに在りと・・・。

@ 参考資料



三五教団系列の全国各地天文台と観測機材(昭和40年前後)

### 三五教の天文施設

2010.7.18

名称	場所	建設	撤去	建物	望遠鏡	その他
天文暦算局	静岡県清水市	1957.1.5	(不明)		シュタインハイル11cm屈折→(国治へ移設)	
中央天文台 (香貫山天文台)	静岡県沼津市	1957.9.21	1973.6.30	回天・開閉 天守閣造	カルヴァー46センチ反射	当初五藤30cmを計画していたが、開設前急遽山本一清氏の望遠鏡を移設
九州天文台	福岡県筑後市	1957.12.25	(不明)	回天・開閉 天守閣造	協和光機製20cm反射→ユニロン16cm 屈折→Nikon20cm屈折	
四国天文台	徳島市眉山山頂	1958.3.25	(不明)	ドーム	20cm反射赤道儀 /ユニロン16cm屈折赤道儀	ユニロンと反射、どちらが先かは不明
奥州天文台	福島県二本松城	1958.4.25	1991	回天・開閉 天守閣造	ユニロン16cm屈折赤道儀	
国治天文台	愛知県岡崎市	1958.9.14	2009	回天・開閉 天守閣造	シュタインハイル11cm屈折→ユニロン16cm 屈折→十三鷹30cm反射	
濃尾天文台	岐阜県多治見市	1958.11.12	(不明)	ドーム	協和光機製 (?)赤道儀	
東北天文台	岩手県北上市	1959.2.21	(不明)	ドーム	21cm反射赤道儀 /ユニロン16cm屈折赤道儀	ユニロンと反射、どちらが先かは不明
肥之國天文台	熊本県山鹿市	1960.10.1	(不明)	回天・開閉 天守閣造	ユニロン16cm屈折赤道儀	
信濃天文台	長野県岡谷市	1963.10.1	現存	ドーム	協和光機製22cm屈折赤道儀	現在一般公開はしていない

上記写真の名称・設置場所・観測機材の説明



山本一清博士と三教天文台主要経緯

1956年10月18日 三教中野興之助南祖、教主会長

山本天文台を訪問(4時間) 天文と宗教  
天文台を造る等

同年11月9日 山本博士、三教末清、講演

〃 12月8日 南祖 花山天文台訪問、山本博士、宮本先生等

この頃山本博士、三教と出入する

1957年1月5日 三教内に世界宗教総合研究所発会式

三層算局南設、観測南始

1月8日 初代台長に山本一清博士 決定

並出席者

山本博士、宮本正太郎先生、長谷一郎先生

古川鹿雄一郎先生、東大教授、中村元博士

元皇族 賀陽恒憲一行、その他

同年1月6日 沿津予香貫山、天文台建設予定地視察

〃 2月6日 山本博士、九州道場訪問、講演

〃 3月5日 〃 四国 〃 〃 〃

〃 3月18日 香貫山、天文台地鎮祭 4月10日

〃 4月初 アレンドロラン彗星観測、中央天文台観測南始

〃 4月30日 新日蝕観測

〃 5月5日 坂井先生 来清、5月6日水星日面通過

〃 5月 丁算局発行約300通、世界天文台に文書發送

〃 7月1日刊 1年、才3回国際地球観測年参加

(参加国66国、観測員数2,500余り所

観測、科学者6万人)

財団法人 国際文化交友会天文部

〃 8月末か9月初、古川鹿雄一郎先生、天文台を去る

1957年8月上旬 マコス. エンケ彗星 観測

〃 9月21日~23日 三ツ教中央天文台完成祭 (現在の月光天文台)  
(御神輿行華. 山本博士. 空服で馬上にて沿津市を行列する.)

〃 10月4日. ソ連 Sputnik 1号人工衛星打ち上げ

〃 10月14.15日 人工衛星観測成功

〃 10月20日 第1回英文「天文回報」発送

〃 10月30日 野尻抱影先生講演

〃 11月7日. 月蝕祭を中心に朝日ニュース640号

〃 12月25日 (東宝系で上映)

↓三ツ教西部天文台完成 (現在の天文台)

その後の経緯は次回送ります。

月光天文台・五味政美前台長作成資料その2



天文活動について

坂井先生の資料

昭和三十一	昭和三十一	10月18日 中野半之助翁 山本一清先生訪問
	11月5日	山本先生 清水本部に見え 本部 18 疊にて山本先生お話し 人数制限あり (12月) → 山本先生本部 沼津
昭和三十二	1958	山本先生、宮本 <sup>博</sup> 中村博士 来清(三浦部)
	3/8	沼津香貫山山頂 天文台地鎮祭
	12/15	宇宙時代と宗教の座談会 伊豆神聖館にて
	5/22 6/2	大町市 加勢鉄工場に香貫山の天文台ドーム製作 (加勢 増田)
	9/2	香貫山 一月光天文台完成祭 (5月22日~6月2日) ドーム製作完了
	10/14	沼津第一人工衛星観測成功 一月光天文台
昭和三十三		
	3/19	徳島眉山天文台、四国三編天文台完成
	4/15	奥州天文台、9/14 国治天文台完成
		1/12 濃尾天文台 (岐阜県多治見市)
	5/27	第一回 全国天文視察会議
	9/13	第二回 全国天文視察会議 (全国各天文台に於)
	11/4	山本先生帰省
昭和三十四		東北天文台 (岩手北上市)
	3/21	開教10周年記念 (陸の大祭典)
	4/11	" 海の大祭典 清水塔-沼津港
	4/10	天文大博覧会開催 50日間 不負
昭和三十八	10/15	信濃天文台完成
		信州で唯一の移動天教室と天文関係の資料を整え 約120万円をご寄付頂く、大町市の金原元道様が個人 にて60万円、更に他に40万かけていただく。外何口か で60万円となる。五島若菜、アトリウム 望遠鏡、 森永乳業 明治乳業からはペンチ 何台か

三五教団信州天文台設立他の資料 その1 (大町市在住・中島英雄氏)



天文年會と { 天文 } 後 勸 教室 坂井先生への資料

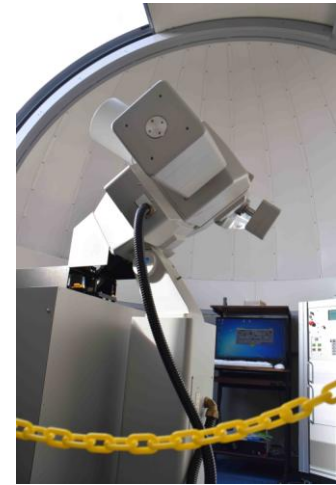
昭和 41年 (1966)	沼津香貫山 月光天文台に於いて第1回天文年會 11月29日 ~ 11月30日 ○ 月光天文台に於いて行なわれぬ天文台員と関係者 参加者は39人であった。(写真あり) ○ 国際天文協会と 財団法人精神文化友会天文部との関係 ○ 沼津の天文台では責任者は費用と準備に力を入れたい ○ 移動天文教室について 修善寺近くの学校で見学
昭和 42年 (1967)	沼津香貫山 月光天文台 - 第2回天文年會 (11月26~27日) ○ 諏訪市の天文台員と一緒に天文台を目指して (写真あり) ○ 5時に起床し専門学校生徒と天文台員と責任者と合同訓練 ○ 中野邦之助翁より天文の重要性について話 ○ 午後は台員、責任者等の自己紹介
昭和 43年 (1968)	沼津-月光天文台 第3回天文年會 11月26日~27日 ○ それぞれの台員が如何なる使命を果すか ○ 各地の天文台員と責任者は使命をどう果すか ○ 移動天文教室の発表
昭和 44年 (1969)	香貫山 月光天文台 第4回天文年會 12月5日~12月6日 ○ 私は4日香貫山天文台到着 (秋松) 山本さん 里中先生と3人 ○ 日和運動の大阪、九州の人々との交流会を行う。 ○ 6日 東京上野科学博物館に月日石を見学に行く。 ○ 9日は関東至会場で休み 次の日は日和運動会場へ 天文年會は44年まで、45年から日和運動に力点 が置かれ、4回で終る。

信州天文台資料ほか その2 (大町市在住 中島英雄氏)

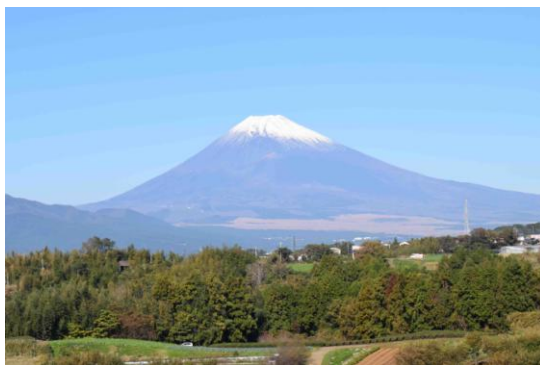
中島氏は、高校教員を生業とされ、天文活動とオイスカ活動に専心された。



静岡県函南町・月光天文台 2019 年現在



月光・太陽投影望遠鏡



月光天文台富岳美観



職員他と共に 2018 年 11 月 15 日  
(中央右へ、坂井・中島・古家・五味)

#### @ 参考文献

- ・ 斐太彦天文処出版物 (岐阜県飛騨私的施設・岐阜金華山天文台通算・坂井義雄編集)  
星と人 No.14 p10～p.11 書道と天文学 小島茂美 (山本天文台訪問等記事)
- ・ 星と人 No.15 山本一清先生を偲ぶ p.1～p.22 (坂井義雄ほか関係者)
- ・ 星と人 No.16 山本一清先生を偲ぶ(続編) 山本先生遺稿他 p.1～p.10
- ・ 第二回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録 〈山本天文台特集〉  
(京都大学総合博物館・理学研究科附属天文台・宇宙物理学教室 2011年7月28日)
- ・ 第3回歴史的記録と現代科学集録・国立天文台 2012年3月9日「山本一清博士とカルヴァー46センチ反射望遠鏡」p.37～p.53 坂井義人
- ・ 第3回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録 〈山本天文台特集その2〉  
「カルヴァー46センチ望遠鏡一時帰郷の事情」p.7～p.11 坂井義人  
(京都大学総合博物館・理学研究科附属天文台・宇宙物理学教室 2012年8月2日)
- ・ 第5回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録  
「山本一清博士の葬儀・慰霊祭について」p.26～p.31 坂井義人  
「山本一清博士とアナナイ天文台」p.42～p.53 公益財団法人月光天文台 五味政美  
「岐阜金華山天文台の活動意義と坂井義雄」p.18～p.25 坂井義人
- ・ 第6回天文学史研究会集録・国立天文台 2017年3月17日・18日  
「輸入された三台のカルヴァー望遠鏡」坂井義人 中村和幸(元・中村特殊光機)
- ・ 失われた近代の知の遺産 山本天文台記録保存調査報告書 山岸常人 平成25年11月